

---

# ハナノナノ（未定） 7

希羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハナノナノ（未定） 7

### 【Nコード】

N4871V

### 【作者名】

希羽

### 【あらすじ】

縦読み推奨です。ご意見感想お待ちしております。

## Cozy Drum roll

入学して、約二カ月が経過した。

最後に五月晴れを天気予報で耳にしたのは確か先週だったと思う。しとしとぴつちゃんな梅雨入りかと思えば、いまいち自己主張の控えめな雨雲が申し訳程度に路上を濡らすのみで、お天気マップには畳まれた傘マークが頻繁に設置されていた。

全国の傘の売り上げを心配しつつ、新調した学生グッズが汚れるのを回避できるため、今年の梅雨前線に対して愛着を抱かずにはいられない僕だった。

溜息を一つ。

地上4階から、窓の薄いガラスを通して望める帰り際の太陽は、どうしてか安らぎと胸騒ぎを孕んだ憂愁を、脳から脊髄へと浸透させる。

全身を巡る夕の匂い。

やわらかいものが<sup>まぶた</sup>瞼を撫でる。

僕は焦点を窓枠までもどした。

ひっそり閑とした校舎の四階突きあたりに、謙虚に構えられた小さな一室。

時間がゆっくりと流れているような、世の中の<sup>わたかま</sup>蟠りから切り取られた空間。

それも主観にすぎずに時計の針は回るのだけだ。

ここは立て付けの芳しくない引き戸がもの寂しい、僕らの部室だ。"約束"をした日から、平凡な日常を今の今までここで過ごしてきた。

適度な筋肉への負荷を施してくれる階段とは既に顔見知りとなつたものの、未だにその一苦勞を毛嫌いしながら、毎日膝を上げる運動に従事させられる。

それでも健気に陸の孤島より天空の城を自負すれば、過剰な階段の往復に苦情を漏らす足腰にも、絶景の天空ならやむを得ないと言ひ聞かせられるだろう。

絶景への過大評価は、窓の向こうに広がる世界に則して、嘘八百の六百までを赤い信憑性で誤魔化してくれる。

そもそも未だに部屋があるからには部活として成立しているわけだが、名称を述べても具体的な目標や指針を予想しづらいのがこの生活応援部の第一の欠点。

そう、生活応援部。

さらに言えば、人様の前であんまり所属を名乗りたくないのが第二の欠点である。

目下、第三第四と新たな発見が目白押しなので僕の目尻も下がりはなし——なんてこともなく溜息の数が日ごとに増えるだけ。

初耳の方々の思考回路に手厳しい、意味不明の該当項目。

見る人が見れば、政党が形だけマニフェストを回避する為に設置したお役所の新しい部署の様ですね、とか辛辣な第一印象を招きかねない。

一月が経過しても、そのやりきれない五文字は変更される兆しかなかった。

そう、僕がここに入部して、今日で一月ちよつとが経つ。

相も変わらず、右往左往もしないまま淡々と暇をつぶす彼女と、それを懲りずに見物しに来る物好きな僕の充実した時間経過の見学会が、暮れる紅を背景色に繰り広げられているのだった。

”約束”は片手に、下心を重装備して突入したものの音沙汰なく潜入に成功。とらえ方によって、潜入より潜伏に思えなくもないというのが今の心境だ。

「そろそろ変化させて欲しい」と第二性徴が進言してくる。

この時期に至ってもなお、同じ階で他の部の活動を確認したことがないまま、結局、誰が望んだのか部室は広さ相応の二人ぼっち空間になり果てていた。

しかし、記憶と言うものが人格に大いに依存していることを実感させられる。

瞬きを使つて、周到にその面持ちを覗いた。

約二年ほど自発的に面会謝絶しただけで、その外見は見違えるほどに変わっていた。もちろんベクトルは好ましい方向で。

そして、見違える以上に目を見張る形で、目を疑い尽くした揚句に背けたくなる具合に、大切な人の内面はソレを失っていた。

そのことを知ったのはついこの間、と表現していいのか、それとも現在進行形で認知の途中経過と考えればいいのかは、今の僕にはわかりもしない。

何かが終わつたときの僕ならあるいは、と皮算用するのも気が遠い。

日々理解していくものかもしれない。

愛とかと一緒に。

——誰かが笑つた——

当の本人すらも、そうであるように。

再会した七恵結は、僕らの掴みかけている正常とか常識とか呼ばれる真理から、半歩分くらい離れたところに立っていた。

懐かしい笑顔で。

そして、僕はこうして、彼女のそばにすることを不確定要素を孕んだまま未回答として選んでいる。

裏を返せばそれは、”拒絶”を選ばなかったに過ぎないことも承知で。

もしかしたら、あの日に違う夢を見たなら、違う選択肢を見出せたかも知れない。

でも、だからといって必ずしもこうならなかった理由はないし、一つのことが起こる理由に一つの原因である必然性はない。

そうやって曖昧にしながら、赤光が奪い去る街の輪郭のごとく本心の影と光の狭間<sup>はざま</sup>をばやかした。  
心で自嘲して、温厚な逆光の中に僕は先輩を、七恵結を見る。  
世界にも悟られない様に、それはそれはゆっくりと。

## S n a p p y   r i m   s h o t

「さくら」

間違いなく走馬灯に採用されるであろう人生の分岐点を通過し、その余韻をぺろりと舐めつつ吟味して現状に目をやると、やはり首を傾けずにはいられない。

視線を足元に落とす。

無機物であることに揺るがない誇りを持っているかのような、生命感が絶えた床。薄傷のコーディネートがたくさん目立つ。

実は揺るがないのは埃の方で、不衛生な無風を間接的に演出していた。

「ラベンダー」

そこには引き算を繰り返された重態の机と椅子が2セット。ひよとすると、学習用以外の机だったのかもしれない。

折れて斜めになった足かけに右足を置いて、胸を張るような形で読書をする先輩。

両腕の関節を伸ばし、肩を落として遠巻きに文庫本を読む姿は、どこか子猫を抱きかかえ眺めるときを連想させる。

再度胸に目が泳いだのは内緒で。

「だりあ」

女子にしては背が高く、淡い茶髪はセミロングで程よい天然もののパーマがかかっている。根元に近いほど濃度を増す髪が、頭上でグラデーションを演出した。

毛根に敵意でも示しているのか、相反して素肌は無色に近い白。それは自分の手で触るのを無自覚に憚<sup>はば</sup>られるほどに穢れのない柔和な何かだ。

「アジサイ」

顔のパーツを一つずつ紹介しようと顔面を参照していると、純粹で塗りつぶされた大きめの黒眼に巡り合う。

理由のない笑みが滞りなく網膜に浮かび上がった。

状況によってはそれは武器として、僕に抑止力を行使する。

しかし、武力行使には屈しない。

「いちよう」

降伏するように両手が上がり、本は開かれていたページをばらばらと隠す。

細い二の腕が光を集めて眩しい。

あくびと同封されて、しりとり終わりが宣言された。

「さつきも言いましたよ。いちよう」

「暇だねー」

「いやいや、罰ゲーム」

「ほんとにやることないアルよー」

えせ中華風日本語でどちらともとれる妄言を唱える結先輩。

「負けたら罰ゲームって言ったじゃないですか。いい加減、花を食べたがる理由を教えてくださいよ」

結先輩は深く息を吐きながら机に突っ伏した。

「だいたい、何？しりとり？そんな嫌らしいお名前の遊びを強要するなんて破廉恥極まりないですわ」

「僕が負けたら、野生の花を摘んで来るって言って話を切り出したのは先輩でしょう」

言葉に同調して疑惑の目線をつくる僕。

「しりません。しりだけに」

てめえは厚顔無恥ですか。

「面白くないですから。なに一人で笑いをこらえてるんですか。早く教えてくださいよ」

今日までにこんな毒にも薬にもならないやり取りが何度繰り返されただろうか。無益であることと無害でないことの無関係さが心に染みる時間の不法投棄。

あれからの毎日と言えば、こうして部室に二人で集まり、軽い世間話をしたり、小遊びをしたりするだけだった。コンビニの安っぽい特集雑誌で知り得た、記憶回帰のためのお手軽な方法は試しつつし、その結果もままならないまま、やがてマンネリ化が始まり、今に至る。

肝心の七恵結（新規作成）はというと、まだ”拒絶”をされる以前の面影が大きく、歳不相応の無邪気さで僕を心の拠り所にしていくようだった。

現実には僕に頼っているのはわかる。静先輩でさえ今の七恵結にとっては心を許しづらい存在なわけだし。

記憶の隅にある粉粒ほどの懐古心さえも、今の七恵結にとっては過去の自分に繋がる貴重品なのだろう。

対して僕。小さな可能性とほのかな執着、放っておけない偽善者魂に突き動かされて約束を護り続ける。

新しい七恵結へは、他人行儀と許容範囲を織り交ぜたように、なんとも言えない態度で内心現を抜かすも、自分でもやはり進展のなさに痺れを切らし始めている感は否めないというか。

提供している時間に対して、彼女の意欲の有無の不明瞭さが納得いかないというか。

緊張するとかしこまって遠まわしな会話を始めるところが癒し、とか僕も焼きが回ってくる。

「しょうがないですねー。まあ言っても理解できないと思うけど」

肩を落とし、好感度の上がりそうな角度で首を傾いで切り出す結先輩。

「なんか落ちつくの」

彼女の艶のある唇は自らその言葉を確かめるように、無音でまた同じ動きをし「それだけ」と締めくくった。

「理由になつてないじゃないですか…」

「そうですね。でもさ、感情的なものだから仕方ないかも。好きなものとかって何で好きとかわからないでしょう？」

「つまり、具体的な理由は最初からないってことですか？」

「ないアル」

賭けごとは最初っから詐欺だったというわけだ。

まあでも、気になつていたこととはいえ、生死を彷徨つて記憶を無くしても、生きていてくれたのだから多少の異常趣味は不幸中の幸いなかもしれないな。

記憶を取り戻してくれば、なくなるかもしれないし。人の目を忍んでくれるなら無くす必要もない。もしかしたら、もともとそういう趣向の素質があつたのかもしれない。

楽観視で寛大に振舞うことにした。

「だいたい、純くんは毎日外眺めて楽しいの？若いうちはもつと時間を有意義に使わなきゃだめだよ？」

かまってくれないことへの不服が、低い響きから伺えた。

叱るようなお節介が今日もいい焼き加減。

そして、二年の歳月は男女なんによだけでなく新たに老若おきなの敷居を二人の關係に追加していたらしい。

「それを言うなら、先輩はいいんですか？というか…その…」

毎日ここに何をしに来てらっしゃるんですか、と言いかけて顎を引く。

その質問をそのまま返されれば、今一步反論に困り行動力が削がれるからだ。

「読書好きですね」

当たり障りのない会話のゴムボールを発射。

すると結先輩は少し置いて、小さな唇をツンと尖らせ「そんなに好きくないですねー」と、不満さを込めて文庫本を一瞥した。

「好きくないのに毎日読むんですか？大丈夫ですか？」

「そういうプレイです」

「反応に困るわ」

この人の羞恥の一線がくみ取れない。

「というのは嘘で」

結先輩は言いながら立ち上がる。

そして半開きの情けない引き戸をぴつと指さした。

「実は…今日も依頼をまってるんだー」

元気な棒読みにつられて気づくと僕の口も半開き。顔は常時情けないので省略。

先輩に視線を戻すとこちらをみて何やら自慢げだ。なにかいいことでもあったんだろうか。

「えっと、それは立ち退き勧告を待っているということであーけー？」

なんだ、プレイではなくスパンの長いボケでしたか。生徒会につこまれるのを待っているんですね。

先輩の手のひらが机に落下し鈍い打撃音と木の軋む音がした。

机の蓄積ダメージはそろそろ限界に近いと推測。そうでなければ七恵結氏の筋力が標準値を上回る。

「君はこの生活応援部をなんだと思ってるのかな？」

なんだこれ、と思ってます。

詰問する口調は始終緩急の緩だけで、囁き声をそのままポリウムアップしたみたいな優しい息の音混じり。個人的には好み、だったりして。

そんな彼女はほんのわずかだけ薄い眉を傾斜させて、なにやら和やかにご立腹。

ちようどいいや。ここでやっと本来の指針を知ることができそう

だ。

とりあえず、一緒にいることが本来の目的でそれ以外何もいらないとか、そんな夢見がちな乙女チックマンガみたいな状況を打破したい。

「私は、いいえ私たちは」

胸元に右手をやる先輩。

少し足りないな、とか煩惱と真剣みを両立させて文末を待つ。

「この学校を陰から支える裏ヒーローになるのよ!」

「……」

今日も遠くのグラウンドでは数ばかりが多い野球部が子音の曖昧な掛け声を張り上げながら練習前のランニングを実施していた。

ばやけた影に便乗してるのかな。誰かみたいだな。いとをかし。会話に向き直る。

思わず「なるほど」と合点してひらめきのポーズをとってしまう自分に、その場凌ぎの脊髓反射スキルを見出して喜ぶべきか悩んだ。ちよつとなにいつてるかわかんないっすねえ。

独立した自主的慈善活動、通称ボランティア（俗称自己満足）なら僕の予想はハズレだけど、依頼とか言ってるし。そもそも裏以前に表のヒーローが目にも耳にも記憶されてないのは、僕自身が社交性とか協調性を欠かした社会問題推進の素質を持っているからだろうか。そうでないことを切望なう、とか流行り言語で最近の若者アピールを試みる。自分に。

「なんやねんそれ」

突発的に口を飛び出した言葉がそれだった。

方言を交えてクッションにする失敗例である。言葉の切っ先は尖ってしまった。

だが、上質の笑顔を武装している先輩にダメージは皆無。

歩み寄って背伸びをし、身長と肩幅を詐称しようとするも、実際にはもの寂しい胸を誇示する結果となった。

胸部ももつと武装してくださいなどと誰が頼めるか。

適度に膨らんでいるのは柔らかそうな右頬くらいだ。

わりと至近距離から黙視されて、鼻息荒いとか言われたくないので息を止めてしまう。

しかし思った以上に持久戦となり、背後の壁のシミを観察する勢いで首をまわした。

身長に関しては平均値を上回る彼女なので、首の付け根を癢つ毛がくすぐって苦痛をかさましする。

「何か文句でも？」

不機嫌そうな声よりも、かかる吐息が敏感な素肌を這いまわるのに我慢できず「ないないないっス！」と、とっておきの呪文を唱えてやっと解放された。

「で、なんなんすかその裏ヒーローって？」

なんとなく顔を合わせられずに会話を進める。

「それはですね」

にやけた顔を連想させる口調で解説が始まる。

「表のヒーローがいるじゃない？」

「はい」

いねえよ。

「そして裏のヒーローがいるの」

「はい」

「うん」

「はい、…はい？」

最後の相槌は間抜けにも裏返りかけて本当にハイになる。

みると予想通りのにやけ顔。渾身のギャグを言った時の様な面持ちで立つてらっしゃる結先輩。

自主的に何度も首を縦に振る運動なんかも始めていた。

新しいダイエット法か何かですか。あとは悟ってくれみたいな顔してますけど。

「全く分かりません…」

「えっ」の状態に先輩の口が開き、時刻を同じくして彼女の両眼の

シャッターが上がる。首を鍛える体操は中断された。

驚かれてしまったことにも驚きを隠せない僕は、一瞬自分の誤りかと錯覚させられ、我に返って異論を認めない姿勢を表す。

「とにかく、その裏ヒーローってやつ活動をするためにあるのがこの生活応援部ってわけッスか？」

「ええ」

「それで依頼を待って一カ月と？」

声が半笑いになってしまう。

部活の内容などはなんでも良かったのだが、つくづくこの先輩の発想が予想の向こう側を出身地にしていた。

「で、依頼ってのはいったいどういう依頼ですか？草むしりとか、球拾いとかですか？」

「違います。ヒーローですから、人命救助や勧善懲悪を目指します」先ほどの半笑いや僕の小馬鹿にしたような物言いが氣にくわないのか、きりつとして言い切った。

「そんな大それたこと、僕らにできると思ってるんですか……」

「というか部活なのかそれ。仮に部活だとしても、全然名称にそぐわない気がしますけど。」

「両方達成した人物が私の目の前におりますが、何か？」

結先輩はいつになくぶすくれて流し眼で僕をチラ見する。

そんなに本意で取り組んでいるつもりなのか。何故だ。

「たしかに、それに近いことはしましたが」

言葉に詰まった。

でも、個人一人に対してそうであることと、どんな人にもそうであることは難易度が途方もなくかけ離れているだろう。

「ていうか、依頼って言いますけど、この部活のことを知っている人はいったいどれくらいいるんですか？」

「それは……」

「いないのだったら、待っているだけ無駄でしょう」

素直に野性の花を食べる会とかに改名すれば潔いのに。

実質、他の生徒に疎まれている人間がどうしてそんなことをする必要があるのか、僕にはわからなかった。

僕は七恵結と一緒に居るだけでも精一杯だ。

彼女が授業中やクラスにいる間、他生徒から距離を置かれ、軽度でもイタズラをされていることは静先輩から聞いていた。

僕自身も、七恵結と繋がりがあるといっただけで、クラスの面々からは一歩引かれているのだ。気にする人ばかりではないけど、これが世間の荒波ってやつだな。違うか。

僕らに、特に七恵結に他人を心配して保護する余裕などないはずなのだ。

「秘密とか言って一カ月放置してましたけど、実際は何にも考えてなかっただけじゃないんですか？ていうか、部活である必要ないと思いますけど。こんな部室まで設けて、校内で活動しなくてもいいんじゃない？ボランティアなら、近所でやりましょうよ？」

「帰って」

少し反抗的に言い過ぎただろうか。

結先輩は窓の方を向いて、本格的に怒りはじめた。

「今日はもう終わり。部活終わりにしまーす。速やかに御退室ください。お忘れ物のないようお気を付けくださいーい」

控えめな物言いの裏で、けっこう怒ってるなこりゃ。

あまり波風立てたくないのが本音だが、今日のことはやっぱり僕も譲れない。

ぶんすかしている程度なので明日になればけろっとしているだろうけど、それでは根本的解決にはならない。

でもだからといってこれ以上怒らせるのも生産的じゃない気がする、僕は鞘をとった。

七恵結は、嘘はつかないというだけで僕に多くは語らない。

家族のこと、病状の詳しいこと、長期入院による体力の減退。そして、”沢村春”のことだ。

構図的に、彼は僕の恋敵ってことになるけど、まるで実感は湧か

ない。当たり前だ。会ったことも、七恵結と一緒にいたところも見  
たことがない。残っている事実は、七恵結が身を捨てるほどに好意  
を寄せていたこと。それだけ。

今の彼女が沢村に対してどう思っているのか。それは”約束”と  
はなんの関係もない、僕の興味の領域でしかない。

だから訊くことは今のところしないつもりだ。  
それともうひとつ。

先ほど本人に訊いても応答がなかった質問。珍妙な部活を気に入  
り過ぎな気がした。そもそも僕と出会う前からひとりで籠城してい  
たらしいがその理由も気になる。

単純に裏ヒーローごっこに没頭中ならば、お花を手向<sup>たむ</sup>けるのはや  
めて脳内栽培に禁止令を発布する必要がある。絵空事でないのなら、  
知っておいて損はないはず。

そのあたりも含め、ある人物に久しぶりに会いに行くことにした。  
これも青春男女の純粋な交流を円滑に邁進させるための一手。

僕は部室を出て、九重静に電話をかける。



(後書き)

ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4871v/>

---

ハナノナノ（未定） 7

2011年8月4日01時04分発行